

彌永先生を悼む

高橋 礼司

この文を書きはじめたときは、彌永先生の百歳を記念してという編集者の依頼があつたことでした。それが思わぬことに先生のご逝去の報に接して、追悼の文という形になってしまいました。先生の学者としての数多くの業績については、佐武さん、三宅さんが詳しくお書きになっていることでもあり、私は個人的な思い出を書かせて頂き、先生のお人柄を偲ぶよすがとなれば幸いです。

「私と外国語」というエッセイ（これは1966年に書かれたもので、先生のご著書「数学者の20世紀」の第3章に収められています）の中で、先生は小学校3年の頃からはじめられた英語が、中学の高学年にゆくにつれて、あまり魅力のある学科ではなくなってきたといわれ、末尾に近く“しかし私は若いときその国にいたため、フランス語、ドイツ語のほうにより親しみをもっている。ことにフランスの人たちとは、学問的にも個人的にも、つきあいが多し”と書かれています。とは言え、先生は英語でも達意の格調高い文章をかかれています。先生のお全集をみれば一目瞭然です。しかし実際先生はフランス、フランス語がお好きでした。私は先生の書かれたもの（とくに1942年の「純粹数学の世界」の中の美しい数々の文章）を読み、先生に私淑して、数学科に入って、この方の教えをうけたいと願ったのでした。それが結果的には、前後25年近く、つまりは成人後の人生の大半をヨーロッパ、とくにフランスで過ごすことにつながったのですが、その節目節目で、先生には大変お世話になりました。その先生がとうとうなくなられて、何か大きな穴がポツカリとあいてしまった気持です。

数学についてのいろいろなこともさることながら、私は先生から‘言葉’を大切にすることも習ったと思っています。先生は言葉についての感覚のすぐれた方で、一寸順序をかえたり、一つ、二つ書き加えられることで、ガラッと変えられるのが美事でした。先生から頂いた澤山の手紙の中で、とくに大切なのは、なくなる数年前2002年12月21日付の八ガキです。そこでは、先生のご示唆で訳した「ブルバキ」について、おほめ頂いたのでした。自分の自慢話になって申し訳ないのですが、それを頂いたときの私の喜びに免じて、お許し下さい。先生独得の鉛筆書きで、平仮名の“か”とか“に”がいわゆる変体仮名であるのは、もうすっかりなれていたものの、二、三すぐには読めないところもあったのですが、そのしばらく後にお目にかかった折に、‘読めましたか’と先生に訊ねられ、‘はい、読めました’とお答えすることができたのでした。

...原著者はブルバキ諸君とはあまり直接の識り合いではなく、あちこちの資料から

ブルバキの業績などを真摯に書き集めたもののようです。訳本を作られますのに、貴兄は自身御存知のことを加えられ、もとの本よりもよくなっている点も見られると思います...

この真摯というところがなかなかわからなかったのです。これは、50年前学生時代にエミール・ボレルの本の翻訳の折にいただいた先生からの初めてののおはがきと共に私の宝物です。

先生とフランスとのかかわりについて書こうとすると、どうしても個人的なことになってしまいます。皆様のご寛容を願って一つだけ書かせて頂きます。

先生はヨーロッパに行かれてすぐにハンブルクのアルティンの所で、フランスから来たシュヴァレーと会われて、数学上も、個人的にも一生の友人としてつきあわれました。それについて日本語で書かれたものをもとに、フランス語でまとめられたのが *Mes rencontres avec Claude Chevalley* というすばらしい文章で、全集の270 - 294頁(又は日仏会館のモノグラフィの別冊 *Mémoires sur l'histoire des mathématiques contemporaines au Japon*(1996)の63 - 103頁)に収められています。1994年に先生の全集が刊行されて、私ははじめてこの文章に接したのです。その末尾に近く1964年から66年にかけて私がナンシー大学に行った時のことが書かれていて、それを先生は *un petit exode de la "grande famille Takahashi"* ...と表現されました。それは私の小さな家族に、三村先生のお嬢様(今の三邊ユリ子さん)と先生の御子息信美さんが同行されたからなのでした。このくだりを読んで、私は20年前のさまざまなことがらを思い出して感慨無量でありました。先生はこの5年後の私の *grand exode* の予感をもってられたのでしょうか?

先生がなくなられて、私はお元気なうちに、お訊ねしておくべきだったことがいくつもあることに気がつきました。しかし、先生の自伝“若き日の思い出”には、そのいくつかについての先生のお答えがほのめかされていると私はうけとりました。それでもまだ先生に伺いたいことは数多くあって、悔しい思いで一杯です。いまは心から先生のご冥福をいのり、お礼の言葉を捧げるのみです。そして、心やさしき彌永先生御一家の皆様にも、これまで先生をおまもり下さったことに心から感謝申し上げたいと存じます。